

ウーマン・リブ

■イントロダクション

こんにちは、上野千鶴子です。

(会場：こんにちはー)

ええ、東京大学で、ジェンダー&セクシュアリティ研究を教えています。が、30年前にはそんな学問、この世の中にありませんでした。学問の世界でも、リストラ、があります。リストラっていうのは一方で、成長産業部門がある。もう一方で衰退産業部門がある。で、学問の世界では悪いが、ドイツ語、なんてのは、衰退産業部門です(笑)成長産業部門のなかに、福祉・医療系がありますが、もう一つ、ジェンダー研究、および、セクシュアリティ研究っていうのは、成長産業部門、なんですね。これは30年前にはこの世に、存在しませんでした。

で、30年前、私はなにをやっていたかという、食えない、大学院生でした。院生、っていうのはなにをやっているかっていうと、私たちは、入院生活、をやってる、っていいます(笑)(会場：笑)ふふっ、もちろん、世間に出たくないっていう、不純な動機で、入院生活を続けるこういうのをモラトリアム入院、っていうんですが、(会場：笑)そういう、入院患者、でした。ですから私はいまでも、プー、をやってる人たちに… プーってどう訳するんでしょうかね、同時通訳の人(笑)、すいません。プー太郎をやってる方には、非常に理解と同情があります。自分もほとんど似たような存在でしたから。で、大学院時代に3回、「社会学つつうのはかったるい学問やなあ、やめたるかー」

と思って、退学を考えました。で、3回考えて3回思いとどまりました。で、そのときに、自分は、自分が学問に向いているとは、まったく思わなかったです。で、また、

「自分を学問向きに変えよう」

とも思いませんでした。そのかわりに、

「学問を私向きに作り替えてやろう」

と思いました。で、それが、女性学、という学問でした。

女性学という学問はその当時の私の目の前に、ふってわいたように、うまれました。で… そのときの、感激、っていうのは、こういうもんです。

「ああ、自分自身のことを、学問研究の対象にしてもいいのね」

で、それまでの学問の世界には、女の居場所も、私の居場所もありませんでした。女性学っていうのは、自分自身のことを研究対象にしてもいい。で、学問っていうのを、あんまり難しいことと考えるので欲しい

んですが、学問、っていうのは、(胸に手をあてながら) ここから… ハートから出発します。

「私って、だれ？」

という一番、基本的な、疑問から出発するのが基本っていうものです。で、女性学に出会って目から鱗で、
「よし！ 学問っていうのを私向きにつくりかえてやろう」

と思ったのが、幸いなことに、私ひとりではありませんでした。それが世界的なある流れをつくったせいで、いま私は、自分のことを、

「ジェンダー・セクシュアリティ研究の専門家です」

と名乗って、みなさん方の前に、このように立つことができるんです。今日はちょっと雑誌を紹介したいと思って、持ってきました。そういうことを考えた女たちが作ってきた雑誌です。「女性学年報」と「女性学」。こちら（「女性学年報」）は、日本女性学研究会の雑誌。1年に1回でて、25号ですから、25年は経っていることがわかりますよね。これ（「女性学」）は、日本女性学会という学会の機関紙で、1年1回発行で今12号です。で、こういうのたぶん、見たことないでしょう？ジェンダー研究センターいけばあるかな？あ、でも、ええ… 買ってください。(笑)(会場：笑) なかに申し込み用紙がはいっています。(会場：笑) で、やっぱりね、情報と知を身につけようと思ったら投資をする。で、3色ボールペンを持って読む(笑)(会場：笑) というわけで、お返しします。商品見本です、汚さないように(笑)(会場：笑)

で、私いま、セールスレディーをやったんですね。こうやって、学問の世界でもリストラが起きて、学問のセールスというのをちゃんとやる必要が生じて参りました。

で、じゃあ、女性学、いまはジェンダー・セクシュアリティ研究っていってますが、それはいったいどうやって成立したかっていたら、なんていっても、「それは、リブから始まった」。

■それはリブから始まった

「それは、リブから始まった」ですよ。

リブっていうのは、ウーマンリブといわれています、とっても評判の悪いものです(笑)(会場：笑) で、日本で、おぎゃーっと、声をあげてうまれたのが、歴史的に考えてみると、1970年の10月のことでした。このときに、「女だけの反戦デモ」、ってのがあって、有名な、田中美津さんの書いた、「便所からの解放」という手書きのビラがまかれます。これが日本のリブの、記念すべき歴史的誕生でした。で、この、「便所からの解放」、「Liberation from the toilet」って、なんなのこれ？女が、便所であること、女が男の便所であること、つまり排泄場所であることからの解放、ということです。当時、私たちは学生運動のさなかでした。バリケード、というのをみたことあるでしょうか、あなた方が生まれる前ですね、バリケードの背後で、性

的に活発な女の子たちのことを、男の子たちが陰でひそかに、「公衆便所」と呼んでいたのを私は知っています。で、のちになってその「公衆便所」という、このとんでもない用語が、日本軍の軍隊用語であることを知りました。それは慰安婦の問題が、日本で注目を浴びたときです。私はびっくりしました。皇軍用語が、学生運動の仲間たちのもとに生き延びていた。彼らが、女の仲間たちを、そういう目で見ていた。性的に活発な女の子は、利用はするが、妻や恋人にはしない、という使い分けをしていた、という、驚くべきことを知りました。

そういう裏切りに対する失望からリブは始まったんです。そのあと、リブ合宿などがありまして、1980年に、女性差別撤廃条約が署名され、85年にそれが批准され、男女雇用機会均等法というものができて、みなさん方は均等法以後の、世界に生きているわけですね。私たちの時代には、女は大企業に、大というか企業に、雇ってもらえませんでした。どうしてか？

「大卒のおんな、どうやって使っていいか、ボクちゃんわかんない」

ってサラリーマンがいったからです。(会場：笑)で、そのせいで私たちの世代の女たちが、企業に就職したいときには、学歴逆詐称、というものをやって企業にもぐりこみました。わかります？大卒の学歴を書かずに、高卒と偽って就職することを、学歴詐称は詐称だけど、低めに見積もる、逆詐称といいます。とんでもない時代でしたねえ、それがわずか30年前です。でも、ねえ、まあそんなこといったら私はほとんど、みなさんの目には生きた化石のように見えるであります。(会場：笑)

■リブをめぐる5つの神話

それです、リブをめぐるのは、いろんな神話があります。

一つは、「リブはアメリカの輸入品である」。この前ある男の学者の書いた本を見ると、「リブは、何年に、日本に、上陸した」と書いてあります。landingですよ(笑)。「上陸した」というのはアメリカからですね。すべて悪いものはアメリカから来るんです(笑)。これは輸入品だという考え方ですが、これは歴史的事実において反証ができます。先ほどお示ししたとおり、実は、日本の女性たちが、自分たちに、リブという名前を採用したのは、あとになって、

「あらそう、おんなじことやってる女が、アメリカにもいるってんじゃないの。ならじゃあ自分たちもそう呼んでみようか」

ってということだったと、事実としてわかっています。従って日本のリブは、輸入品ではなく、自前の思想と行動だったのです。

で、二つ目は、「リブはブスのヒステリーである」。よく聞きますよね。ええ、ブスのヒステリーかどうか、

私をご覧ください。(会場：笑) まあ、あの、証拠になるかもしれません。これも反証がいっぱいあります。

それから三つ目は、「リブは暴力学生の女性版である」。当時、学生運動っていうのはヘルメットをかぶってました。当時、ピンクヘルメットをかぶった女が、不倫をした男の職場にわざわざ行って「会社やめろ」っていったっていうのが、大変メディアで取り上げられましたが、実はそれは、メディアが絵になるトピックだけを、センセーショナルに取り上げたということがわかっていますので、これはメディアに責任があります。

よっつ目は、「リブは一部のはねっかえり女の暴走である」。実はリブはそうではありません。はねっかえってない女は、どこにいるのか。結婚して、家庭には行って、主婦やっているって？。実はリブには「主婦リブ」というものがあります。リブは家庭にはいった女たちのなかにも、深く静かに、その影響を浸透させたってことが、わかっています。

それから五番目、「リブは「被害者の正義」の主張である」。

「だって一、泣かれたらしょうがねえよなあ」

「あんたが悪い」っていわれりゃ、しょうがないよね」

って、リブを敬遠する男の人はたくさんいるんです。

「おれたち敵にまわすんだろ？」

っていう風に。でも、リブはそんな単純な思想ではありませんでした。私は女ですが、破壊力の強い女です。(会場：笑) 男とまともに、サシで、カッとなると、私は相手を、潰します。(会場：笑) ですから私は、女の破壊力や攻撃力をよーっく知ってます。女は決していつでも弱者や被害者であるわけではありません。日本の女もまた、いつでも弱者や被害者であるわけではなく、子どもに対しては、加害者になり、あるいはアジアに対しては、加害者の共謀者になる、ということをやってきた。リブはスタート当時から、被害者であることと、加害者であることが入り組んでいる、

「私は、ただ単純な被害者じゃない」

っていうことを、自覚していました。ですから、いまいったこういう神話っていうのは、リブっていうものはつまらない考え方だって、貶めたい人たちが作りだした、デマ、ですよ。

■『婦人・女性・おんな』

加納政直さんっていう歴史家。これ間違えちゃった、正直（しょうじき）さんって書いてあるけどこれは政治の政です。(パワーポイントに訂正を加える) ええっとねえ、私最近パワポ始めたばかりでねえ、パワポ・バーজনなんで、面白くってしかたないんだ。(会場：笑)

で、「婦人・女性・おんな」っていう89年の本なんですけど、とても面白い。で、これねえ、「婦人・女性・おんな」って同時通訳のかた、どう訳すんでしょうねえ、「Women,Women,Women」って訳すんでしょうかねえ、(会場：笑) It doesn't make any sense ですよねえ。(会場：笑) で、どういうことかっていうと、これ、歴史的にとっても重要な呼称なんです、なぜか。加納さんは、男でありながら女性史のすぐれた研究者ですが、日本の女は自分たちをどう呼んできたか、という呼び方の、歴史的な変遷なんです。

で、「私たち婦人は」、っていうか、「ご婦人は」、っていうでしょ？ご婦人の英語訳は、たぶん ladies でしょう。でレディーたちっていうのは誰か。メイドがついてない女はレディーなんていっちゃいけないんです。女中のいない女は、奥様なんていっちゃいけないんです。奥様は奥にいる女で、出ばってちゃいけないんです。外に歩いている女は外様っていうんです。(会場：笑) で、婦人は婦人でない女を、抑圧してたんです。

婦人の「婦」っていう文字をよく考えてみると、この象形文字の語源は、なんだかいやらしい。よくよく見ると女篇に帯って書いてある。ふざけてる、っていうのでこれは使わなくなったんです。男性と女性は対等だっていうんで、対称性のあった名前を使おうと思って、「女性」っていう言葉ができた。でも、リブの女たちは、「おんな」と自分を呼びました。「おんな」っていうのはねえ、

「おい、そこのおんな」

っという風に使われていた言葉なんです。蔑称なんです。名もない、敬意を払う必要もない、路傍の女に対して、呼びかける蔑称だったんですね。それを自らが引き受けたんです。なぜかっていうと、「便所からの解放」という田中美津さんの記念すべきパンフレットが、こういうことをいってました。

「妻・母向きの女と、公衆便所をやる女・娼婦のような女とに、女は分断されてきた。」

いまでもときどき女の子にこんな相談受けて、迷惑するんですけど、あの、

「彼がね、私に、せがむのよ」

なにかわかるでしょ、いわなくても、通訳しなきゃだめ？(会場：笑) で、

「許そうかどうか、許すと自分が軽い女だと思われるんじゃないかと思って怖くって」

つまり性的な関係をもったとたんに、相手が自分を、まじめな恋愛の対象とは考えなくなるんじゃないのか。一方では軽い女、もう一方では妻・母向きの真面目な女という分断のなかに、今の女の子たちも、置かれていないわけではない。だからできるだけ、遊んでるように見えないふりをしよう、とかね。女の子たちはこういうぶりっ子やってきてるわけなんですけど、その分断を強いたのは男たちです。私は、妻にも母にもなりたいが、でも性欲もある、そういうまるごとの存在として自分を認めて欲しいという、そういう考え方から、おんな、というこの言い方を、敢えて選びました。

■ 「おんな」になる、ということ

「おんな解放！」とかいつてきたんですが、「おんな」ってなにかということですね、ボーボワールっていうお姉さんが、

「女は女に生まれるのではない、女になるのだ」

と、ずいぶん昔にいつてます。いまからいうと大変先見の銘のあった言い方なんです。これは、最近のはやりの社会学理論でいうと、「構築主義的ジェンダー理論」っていいいます。ええ、Constructivism theories of gender、ですね。

でー、私は、ビギナー向けのことから、最先端のジェンダー理論までを全部カバーして、しかも解りやすくいうというウルトラ C にいま挑戦してるんですが、あの、上野は、難しいことを、解りやすくいうのが、得意です。はい。(会場：笑)

ポスト構造主義理論っていうのは、いまジェンダー理論の一番の最先端なんです。ジュディス・バトラー、という研究者がいます。こういう人たちがいつてきたことが、ようやく私たちの間にも普及し、定着してきたんです。

「自分が女である」

っていうことはどういうことか、っていうと、

「女で“ある”、ということはない。人は、女に“なる”のだ」

「女になったときに、私は女で“ある”、ということ、を、“ジェンダー・アイデンティティの構築”というのだ」

「それには次の三つの要素が関係している」

と、バトラーはいいました。

第一は、呼びかけ、です。アルチュセールという、妻を拳銃で殺して自殺した、アル中で気違いのマルクス主義学者がいますが、アル中でと覚えるとアルチュセールっていうのは覚えやすいんですが、(会場：笑) ええ、その人が思いついた概念です。これがなにかっていうと、

「おいそこの女」

っていつて、

「は？」

っと振り向いたときに、私は、女っていうポジションに、ピンで、ぽっ、と留められる。例えば、

「おーいそこのべっぴんさん」

っていえば私ニッコリ振り向きます(笑)。(会場：笑)

「おーいブス」

っていったときに振り向くかどうか。ブスって言われて振り向いたときに、あなたはブスに、なるんです。
あるいは、

「おい、そこのプー！」

っていったときにこのなかの何人が振り向くか。(会場：笑) でプーと呼ばれてて振り向いたときにあなたはプーというカテゴリーを、自分に引き受けることになるんです。まずは、この呼びかけという、理論です。

二つ目が、言語行為です。

「言葉というものは言葉を発したことによって、すでに一つの実践的な行為になっている」

ということを出した、優れた言語学者がいます。それがオースチンという人で、弟子がサールという人ですが、勉強したい人は勉強してください。

「お前は女だろ？」

といったときに一つの行為、名付けという行為がおこなわれている。

「私を女にしたのはあんただ」

ってということになるんですね。

それから、三つ目に、こういう言説実践が反復されていきます。例えば、クラブ活動なんかでも、遅くなったら、

「もう時間だから、君女の子だし、もう、帰ればー？」

……っていったときに、

「あなたは、その相手を、女に“した”」

ことになる。

「もう時間だし、帰ればー？」

っていったときに、

「夜道はあんたには危ないよ、だからこれ以上はあなたにはゆるされない時間と場所だ」

という、抑圧を、行使したことになる。

……ですからこういうもの、言説実践、discursive practice と呼んだのは、ミッシェル・フーコーさんなんです。アルチュセールとか、オースチンとか、フーコーとか、こういう名前をいろいろいうけど、全然覚えなくていいです。こういうのはなにかっていうと、あのペナンティックな記号でね、こういうのをこけおどし、といいます。(会場：笑) はい。で、あの、こういうことを繰り返しているうちに、人は、ある権力を行使し、そのことで、人はあるカテゴリーを自分に引き受けていく。で、それが繰り返されていくと行為がどんどん溜っていく、これを沈殿というんですが、sedimentation というのがもともとの概念です。これはマ

ルクスの用語です。これはもとはですね、

「商品とは、人間労働の沈殿である」

ということからきています。今日はアカデミックだね。あの、これ覚えなくていいですよ、解ればいいんだ。理論というものは、腑に落ちればいいんです。で、こういうものの繰り返しの効果として、いつの間にか、

「あなたはだあれ？」

って聞いたときに、進んで自ら、

「私は女です」

とか、

「私は ICU の学生です」

とか答える私ができてしまう。こういうものを、ジェンダー・アイデンティティの構築と呼ぶんだ、というのが、これが最先端の理論なんですね。だから、あなた方は、男もしくは女としてふるまうときに、男や女が誰かっていうと、男としてふるまったときにあなたは男になる。相手を女として扱ったときにあなたは相手を女にする。こういうことが理論的にいわれるようになりました。